

## アクティヴ・インタビューと語りの生成 —— 訊き（聴き）手と語り手が協働する“きき方”と“書き方”について ——

時岡 新  
金城学院大学  
atok@kinjo-u.ac.jp

### Active Interviews: Based on Interaction and Collaboration between Narrator and Narratee

TOKIOKA Arata  
Kinjo University

*keywords: Active Interviews, Narrative, Interpretation, Descript*

本稿は2019年6月16日・福祉社会学会第17回大会 テーマセッション③において行った報告を論考のかたちにした一篇である。セッションはタイトルに「学問の不可視の前提を外して研究しよう」と掲げ、筆者はとくに方法論をめぐる問題提起の任にあたった。

対象理解のために、その対象じしんに問いかけ、対象から与えられた言葉を用いて記述するさい、私たちはどのように作業を進めているか。とりわけ、このテーマセッションが射程に入れるところ、すなわち社会制度的な枠組みがうまく効いている領域（福祉、保健医療）で、対象をひとしなみに押し込める制度的な制約と、対象の個々別々の多様性と総合性とをいずれもじゅうぶんに把握しながら研究するための方途はどのようなようであるか。

ここではそれらのなかから、訊き（聴き）手と語り手が協働して認識を生成するための“きき方”と“書き方”について書き述べる。

#### 1. はじめに

なにかしらの「調査」にもとづく論考、たとえば調査票調査によって得られたデータを用いた論考があって、それが調査票の構成や具体的な質問文、回答選択肢を明示していないとすれば、どうだろうか。私たちはさまざまな機会に、適切な質問文の作り方やそうでない質問文の実例などを詳しく学んできた。なかでも「掃海艇派遣」をめぐる調査について伝えた新聞記事（『朝日新聞』1991.5.9朝刊）を例に採った解説は社会学を学ぶ者たちにはたいへんによく知られてきた（大谷ほか編 1999: 83, 2005: 101）。だから、いま、たとえば平成30年10月の内閣府「外交に関する世論調査」（総務省 2018）に依拠しながら「9割をこえる国民が日本は国連PKOに参加すべきだと考えている」などと主張し

たいのなら、その長い質問文をすべて再録し、どのような選択肢の回答数を足し合わせたかを明記するのは当然である（さらに詳細には、社会調査士資格取得のために学生が受講する「社会調査の基本事項に関する科目」などで学ぶことができるだろう）。

このように、調査票調査ならば、紙幅の制約さえなければ論考の本文中または末尾に質問文や選択肢をできうるかぎり呈示してデータの妥当性をうたうことは奇異でない。しかし、長時間にわたる聴きとり調査、それが非構造的なものであるほど、データとして用いる語りを得るために発せられた調査者の“なにか”が不可視であっても喧しく咎め立てされないのはなぜだろう。語り手が「何より一番大切なことはね、諦めない気持ちなんだよ」と語気をつよめて教えたのは、直前、聴き手が話題を替えようとして手もとのノートばかりに目をやっていたからかもしれない。その気を惹こうとして言われただけかもしれない。その「諦めない気持ち」の言葉を、かれにそう言わせた聴き手のありさまとは無関係にデータとして用いながら、あなたは「9割がPKO参加に同意」を嗤うことはできないはずである。

ゆえに筆者は、聴きとった語りを編集して記述しようとするばあい、これは私の訊き方に由来する度合いのつよい応えだと思ふものは、心がけて、私じしんの発話についても書き示すようにしている。それらを見留めて幾人かの研究者は、私の著述を「執拗に問いを重ねる……（本書のスタイルは）……聞き手の個性に属するところも大きい」と評してくれる。むろんそれはありがたい。だが言われるほど思う、たいていの非または半構造化インタビューの実施者はじゅうぶんに問いを重ねているのだが、たとえば学会誌などの投稿規定（字数の厳守）に抗う術もなくみずからデータの片翼を見せずにおくのだ、と。

好機にめぐまれ、筆者はこれから「インタビューアの痕跡をできるだけ除き、つよい介入を控え、調査対象者の心もちに沿った傾聴をむねとする旧来のやり方をとらず、訊き手としての私じしんの疑問や関心をじゅうぶんにいかした問いを重ね、それゆえにこそ得られる語りの追求」（時岡 2019）について思うところを開陳するのだが、前段までに言ったとおり、私の作品のいくつかは調査データを用いた論考として然るべき情報（訊き手の問い）を明示したまでであり、それらがきわだって「執拗」なものとは自認していない。それゆえ本稿では、問いの「しつこさ」を言いつのるのではなく、問いがなければ応えは生まれないという「調査の基本事項」を、筆者の作品などにもとづきながら紹介することとなる。

## 2. 「作品」としての論考（調査記録）

話題のひとつめは、筆者の「作品」について、である。後節で議論の材料とするのは私が自死遺族（家族が自死によって他界した人たち）に訊いて書いた記録のなかから選んだ3点なのだが、そのなかの1点で語り手のKさんによせてもらったコメントの一文に「時岡さんのまなざしを通して普段気づかない自己自身を垣間見る事のできた『作品』でした」と記されていた。社会学を絵画に喩えるのもひろく知られたやり方だが、一人ひと

りの経験や心もちを聴いてまとめ、その“肖像画”を描こうと努めている私には、この語りはわが意をえたものであった。それ以上に、かれが「作品」と呼んでかれ自身と私の書いた記録とのあいだに置いた距離は本質的である。実物大の地図が無いように、まるごと、あるがままに何かを写し撮ることはできない。その当然をかれは三つの契機に分けて示した、すなわち「時岡さんのまなざし」「普段気づかない自己」「垣間見る」である。

筆者の物してきた調査記録はすべて「作品」である、すなわち対象となった人物のまるごと、あるがままにはなり得ないという話題をふまえて、ふたつめに、前段三つの契機について申し述べたい。本稿（および本稿冒頭で紹介した「テーマセッション」）にもっともかわりの深い言明は「普段気づかない自己」である。一般に多くの調査は、回答者がつねひごろ、自覚的に思念していることがらばかりを訊くわけではない。先に挙げた「日本のPKO参加」にしても、それと問われて、あらためて考えてから回答するはずである。だが、ここで言われた「普段気づかない」という意味あい、度合いは「PKO参加」とは性質が異なる。PKOについては「わからない」との応答がゆるされている（選択肢として用意されている）けれども、私に訊かれたKさんは無理にでも、質問に応えようとしてみずからをふり返り考える。そうして、訊かれたから考えて言うのだけれどね、との前置きがふさわしい、その場ではじめて生成されたかれの自己認識を、誰よりはじめて私に語って聴かせるのである。こうしたインタビュアーのはたらきかけによる語りの内容の拡張や深化（能智 2011: 214）は、少しく強調するならば新しいKさんを創り出す過程とさえ言い得て、結果、それらを編んだ記録は「作品」と呼ばれることにもなる。

議論の厳密さをもとめずイメージづくりのために大づかみに言うのだが、調査記録の持つ“作品性”はそのとき、訊き手が発する問いの、とくには回答者から見た意外性や、いくらか無理やりにでも回答を引き出そうとして待ち受ける姿勢などの関数である。筆者が提出した、本稿で用いるのとは別の調査記録にむけてひとりの評者が「執拗に問いを重ねる」と表した（庄司 2018）のは、評者にとってもその質問が意外であったり、あるいは回答者が即答できないありさまが紹介されていたり、おなじ質問が、多少の言い換えをしながらもくり返されていたからであろう。そうした筆者の問いかけを、先にKさんは「時岡さんのまなざし」と呼んだ。

筆者のやり方はまた、前段とは別の評者によれば「（語り手の）言うことをなかなか理解できない著者がしつこく質問」してつづく二人の会話がときに要領を得ず、読んでいると苛立つ（伊藤 2018）ものでもある。けれど私は、それをやめない。なぜか。後段でくわしく見る自死遺族からの聴きとりを引きつつ言えば次のようになる。

ひとつには、訊いてみなければわからないから。木村俊介はみずからの取材体験をふり返って「インタビューによる取材は、自動販売機のように『目の前にいる相手のなかから、なにかかたちが定まっているものを取り出す作業』ではないのではないかと記した（木村 2017: 6-8）。調査対象者には自動販売機のような商品サンプルの陳列棚もない。思い定めた何かの中にある決まった手順でそれが間違いなく出てくる、ものではない。対象者

の心情を、ましてその由来について知ろうとするならば、なおさらである。家族の自死を悲しいと語り、それにむけて時岡に「なぜ悲しいのですか？」と訊かれて言いよどむ回答者のありさまは自然である。しかし、研究者である読者が“そんな当たり前のことを訊くのはおかしい”などと思うのであればそれはまったく不可解である。私は、訊かずにはおられない。

もうひとつには、聴いただけでは必ずしもじゅうぶんではないから。筆者のもとめに応えて教えられた調査対象者の心のうちは、それとして書き留める。けれどはたして、それのみで多くを説明し、理解できるだろうか、べつの可能性はないか。こうした研究者としての構えは筆者のばあい、ときどきの調査対象者から都度、しつけられてきた。自死遺族の一人、みゆきさんはインタビューのさなか「人が人と死に別れた時の感情の中で『悲しい』とか『さみしい』っていうのはほんの一部ですよ。そこらへんが（わからないのが時岡や自死遺族をとりまく人びとの）浅はかなところっていうか（苦笑）。人が死んだら悲しいだろう、さみしいだろうしか想像がつかないところが、たぶん（遺族にたいする）『無理解』につながってくるわけですよ……（小笑）」と筆者を諭した。家族が他界すれば悲しいと思って疑わないことは、およそ研究的な態度ではない。私はそう学んだ。

ここで大切なことは、そうした“思い込み”のようなものは回答者じしんにも多分にある。だから聴きとりのなかであらためて訊かれ、即答できない場面はいくつもある。前段とおなじ、みゆきさんとの対話。「筆者、困難とは。何だろうねえと考えてみゆきさん『まあ、思い通りにならない、ってことですかね……』」。筆者、その時の気持ちを表現してほしい。さらに長く考え込んでから。みゆきさん『ちょっと劣等感まじりの……、くやしい怒り……（小笑）』。怒り、ですかと小さく訊いた筆者に彼女は『だから、劣等感まじりのくやしい怒り』とくり返して、『あ、でも、怒りよりくやしきの方が強いかな』と小さく応えた。みゆきさんははじめ、話題になっている自分の心もちを「困難」と表した。それを使ったならば筆者は「彼女は困難を感じていた」と書いただろう。別の言い方はできますかと訊いて彼女が「思い通りにならないこと」と言えば、「彼女は思い通りにならない困難を感じていた」と書く。今回、私はさらに問い、みゆきさんは「くやしき」を教えた。だからそれを書いた。問いが応えを生み、応えは問いによって異なり、得られた情報が論考を支える。いずれも社会調査の基本的な当然である。

ただ、先のKさんのコメントに戻れば、時岡の問い、すなわち「まなざし」に応じて示された言葉は回答者にとって「普段気づかない自己」のようにも思われ、聴きとりの場から離れてずっと持ちつづけ感じつづけるようなものでもない。だからその自己は「垣間見た」ていどのものにとどまる。またその言葉は今回の調査に先立ち、調査とは無関係に回答者の胸中にあったものでもない。あるいは問いかけの言葉と併せて聞かなければ意味の取れないわずかな片言かもしれない。このようなわけで、筆者のばあい、回答者の応えがこちらの訊き方に由来する度合いががつよいと思われるほど、私じしんの発話もかくさずに書き示すことにしている。もちろんこれも私の独創ではなく、調査票調査による論考が質

問文や選択肢を秘匿しないのとおおよそ同意の作法である。

### 3. アクティヴ・インタビュー

話題の三つめに、以上のような筆者のとりくみを、ひとつのインタビューの理論、視点に沿って整序したい。すなわち J・A・ホルスタイン& J・F・グブリアム

(1995=2004) による『アクティヴ・インタビュー——相互行為としての社会調査』との対照である。筆者の聴きとりやその記録は同書に全面的に沿ってなされたものではないが、みずからの聴き手としてのあり方や分析、記述を自省的に吟味するにあたり留意すべき準拠点として、同書をたびたび机上に置いた。かれらは「あらゆるインタビューが、気づくか気づかないかには関係なく、現実を構築し意味を作り出す場面になっている」と強調し、「意味を作り出すプロセスが、インタビューの中でどのように展開するか、その『方法(how)』を理解することは、そこでの実質的な質問や回答の「内容(what)」を理解するのに決定的に重要だ」と考える。これらは直接には伝統的な「回答の容器アプローチ」への対案として示されたものであるが、ひろく社会調査の一般、先にふれた調査票調査にも妥当する見識であろう。

同書はまた「研究者が調査トピックを決め、つぎに回答者の選択を行い、質問し、回答を得、そして最後に回答の解釈を行うまで、インタビューという行為は意味を作り出すひとつのプロジェクト(企図)なのである」と約言する。筆者がKさんやみゆきさんに訊いて書いた、いや、かれら「と共に」してきた一連の作業は、かれらの「自死遺族としての意味」を文字で書き示すプロジェクトであった。私が「それはなぜですか」とか「違う言葉で表現してください」とくり返し訊くことで得られた応えを、問いと応えをひとつみにしながら解釈して順にならべたからこそ生じた「意味」の一覧がいくつかの「作品」となった。

ホルスタイン&グブリアムは最終章、最終段落をこのように締めくくる。「分析者の報告は、インタビュー参加者たちの語りを『脱構築』するほどまで、要約したり、編集したりせず、生きられた経験に関する語りのドラマにおいて『何』がどのような『方法』でなされたかを読者に示すのである」。私はそのひとつをKさんにして(私のどの「作品」でも、まずもっての提出先は語り手その人である)、かれは「時岡さんのまなざしを通してながら普段気づかない自己自身を垣間見」た。

### 4. 佐川佳南枝『記憶と感情のエスノグラフィー』の記述から

四つめの話題は、前述したように考え、努めている筆者がおおいに学んだ研究(長編論文の一部とこのことだが)である佐川佳南枝(2017)の『記憶と感情のエスノグラフィー——認知症とコルサコフ症候群のフィールドワークから——』に拠りながら申し述べる。同書の全体を紹介するための紙幅はないが、ここで注目したいのは、インタビューが対象者の語りをどのようにうながしたのかを、調査者の「ふーん」までも略さず書くことで克明に綴

った手法である。また、たとえば「第4章」では3組の夫婦から聴いているのだが、それぞれで語りの引用の仕方が異なる。それはあまりに当然で適切な手法だと私は思うのだが、学会誌の査読では間違いなく統一が求められるだろう。著者が異なる引用の仕方を用いたのは夫婦ごと、話題ごとの語りの性質の違いに沿ったものなのに、想像上の査読者は分析者の手前勝手（それを作業仮説と言い飾るかもしれないが）を不動の準拠軸としなければ学術論文ではないと言うはずである。ただし、同書でのそれらの登場は密着し一々の断りもないため、読み手にはたいそうな労を強いるとの評（池田 2019）は妥当である。

とまれ、佐川著、第4章「夫婦における記憶と親密性の変容」は、3組の夫婦が「会話により現実を構築し維持していく」ありさまを、著者・佐川の発した言葉とともに鮮明に描いて私たちに伝える。

#### 第1節 松島さん夫妻へのインタビュー（夫・良次さん、妻・綾子さんが同席）

=== 以下引用 ===

海と船は良次さんの生きがいだ。（中略）朝は買い物をして船を見に行く。

「買い物行って。船もやっぱり、あの、船も夏中、牡蠣が入るんだね、船の船底に」

「牡蠣？」と尋ねると、

「ああ、貝がいっぱいひつつくんよ。やっぱり取ってやらにゃな。ドックして船を」

「取らんにゃな」と綾子さんも会話に加わる。

「船が出ん。船が走らんようになる。（中略）船も浄化して、船の……」

「底」と綾子さん。

「底をな、塗るんだあね。やっぱりあの、牡蠣なんか入らんように船底塗料をね」

このように夫婦で言葉を引き継いだりしながら同じ文脈を共有して話が進んでいく。

=== 以上引用 ===

やりとりのうち、本稿（および本稿冒頭で紹介した「テーマセッション」）のねらいにそくして重要なのは「「牡蠣？」と尋ねると」「「取らんにゃな」と綾子さんも会話に加わる」「「底」と綾子さん」の三箇所である。いずれも前後の良次さんの言葉と接続されて一体となる。綾子さんの“合いの手”はしかし、夫婦の会話による現実の構築、維持そのものだから残され、書かれるほかはない。たいして、佐川の「「牡蠣？」と尋ねると」は良次さんの「ああ」とともに削除されても文意をまったく損なわない。佐川はなぜ、ことさらその一行を入れたのか。佐川の真意からは独立して、誤りなく言いうるのは、佐川の一行と同じく綾子さんの“合いの手”がなくとも文意はまったく損なわれないこと、綾子さんの「底」と同じく佐川の「牡蠣？」もそこでの会話を構築していること、である。著書のこのページで示されるべきは良次さんによる“船を手入れする必要性の解説”ではない。良次さんと綾子さんが「同じ文脈を共有して話を進める」ありさまである。綾子さ

んは良次さんと一緒になって佐川の問いかけに応えている。佐川の「牡蠣？」がなければまるで良次さんと綾子さんが正対しているようにさえ思われるが、じっさいには、ふたりして佐川に話して聴かせているのである。「牡蠣？」の語はそれを過不足なく読者に示し、場面の理解を助けている。

## 第2節 藤川さんへのインタビュー（夫・正治さん一人への聴きとり）

=== 以下引用 ===

（前略）夫婦で作る共同物語は、一方の語り手をなくして空疎化しはじめる。記憶が残っていかない寂しさを正治さんは何度も繰り返す。

あんまりもう遠くには行かれんと思う。どこまで行ったにしてもね。うん、全然記憶ないんだから。おととしの分もその前もね、全然記憶ない。だめですね。思い出が残らないんですよ。ねえ。自分の記憶でないんだからね。行った所がわからない。

「それはやっぱり淋しいことですね」と問いかける。

確かに寂しいのは寂しいね。話を通じないんだから。（中略）夕方になると買い物に行かんといけんという頭だけはある。昨日はね、鶏の唐揚げとお煮しめの出来たの、出来合いを買ったの。自分で勝手に持って来てね、「これ食べる」ちゅうて。うちに帰ったらね、「これ、誰が買うたん？」ちゅうて。

その場ではコミュニケーションが成立しているように見えても、記憶として残っていない。少し後に尋ねれば、それはもう覚えていないのである。

でも、確かにね。寂しい気がするね。どうこう言うてもわからんからね。「どっか行こうかー？」ちゅうても「うん、行ってもいいねー」って、どこ行くとって気もないしね。行っても全然覚えてないから」（後略）

正治さんは妻のことを「今を生きている」と語った。実際、現在進行形の相互作用は一見成り立っているように見えるが、空疎化しており、彼女のなかになんの痕跡も残さない。  
=== 以上引用 ===

何より明記しておかなければならないのは、藤川さん（正治さん）の節がはじまってからただの一度も、正治さん当人からは「淋しい」「寂しい」の声は聞かれていないことである。もちろんインタビューのそこかしこで正治さんはそうと言ったのかもしれない。けれど少なくともここで引いた2ページのなかで、まずもって「淋しい」と言ったのは佐川

である。また妻の記憶が残っていない事実「寂しさ」というラベルを貼り表したのも佐川である。正治さんは「それはやっぱり淋しいことですね」という“うながし”に応えて、「確かに寂しいのは寂しいね。話が通じないんだから」と語りはじめ、「でも、確かにね。寂しい気がするね。どうこう言うてもわからんからね」とも語ったのである。かりに佐川が「それはやっぱり淋しいことですね」の一行を書かなかったとすれば、それは調査票調査の質問文、選択肢を教えずに「9割がPKOに賛同」と主張するにひとしい。言い換えてみれば、正治さんは「話が通じない」「言うてもわからん」寂しさを語ったのではなく、訊き手の「淋しいですね」にうながされて二つの具体的なできごと（「略」した部分、前者では買い物、後者では墓参りに行ったことを忘れた）を語ったのである。

### 第3節 森さんへのインタビュー（夫・修治さん一人への聴きとり、\*は佐川）

=== 以下引用 ===

しかし私は修治さんの次の発言に戸惑ってしまった。それは、私が、今の修治さんにとって奥さんはどんな存在なのかを問うたときの答えである。

森：ははは……存在いうて……ははは、赤ちゃんだな。まあ、1歳から1歳半、よちよち歩きの。（後略）

\*：うん。前の家族会ではね。あの一、多分、自分のね、陰のような存在だってね。（中略）陰のような存在だっていうふうにおっしゃってたような言葉が印象に残ってるんですけどね。

森：うん。まあね、どこにでも連れて行くし、最近は何こうからどこ行くのも尻付いてくるようになった。（中略）ほんとに赤ちゃんみたいなことする。

\*：そういう、何か「かわいい」という意味？

森：そうやね、ほんとにかわいい。まあ、年取ってるが。ははは。（後略）

着替えのときも「さあ、お父ちゃんに服を着せてや」と言うと「はい」と言って何かそのような仕草をしたりするという。私は、現在の妻の存在を問うたとき、まさか修治さんから「赤ちゃん」という言葉が出てくるとは思わず、戸惑っている。「認知症の老人を赤ちゃん扱いしてはいけない」というのはケアするスタッフの常識だからであろう。修治さんは私たちスタッフや家族会のメンバーたちにとって、理想的介護者像であった。そのため私は、「影のような存在」つまり一心同体という言葉を引き出したくて、口にするのだが、やはり修治さんから返って来る答えは、「赤ちゃんみたい」となる。

=== 以上引用 ===

筆者はケアの専門家ではない。だから森さん（修治さん）が妻を「赤ちゃん」と言って



もなにも戸惑うことがない。佐川は戸惑ったと書き、ケアスタッフの常識として「赤ちゃん扱い」はいけないとも書く。本文ではこのあと、修治さんが妻に愛情を感じ、コミュニケーションをあきらめず、親密な関係性を作り続けているという分析が付されていく。私、時岡は疑問に思う、佐川はなぜ戸惑ったと書かなければならなかったのか。全部を引用するわけにはいかないが、その後の分析ではまるで修治さんをかばうように「しかし……（かれは妻とのあいだに）……生き生きとしたやりとり」をしているとか、脳科学（！）の知見を紹介しながら「これを前提とすると森さんと妻との母親と幼児のようなコミュニケーションは、納得できるものとなる」と書き重ねる。くり返すが、筆者はケアの専門家ではない。だからわざわざ脳科学の分野にまで拠らなくても、修治さんが妻を「赤ちゃんみたい」に「ほんとにかわいい」と思っているならそれとして納得できる。また本文に読むことができる範囲で、「赤ちゃん」発言はインタビューになんらの支障も生じさせていない。

書かれていることに拠って言うなら、戸惑うのは「ケアするスタッフの常識」を持った人びとのようである。すると、まったくの私の想像だが、修治さんのこの愛情にみちて生き生きとした、妻の存在を無条件に肯定した親密な関係性のありさまは、たった、ケアスタッフの常識などという取るに足らない思い込みのために、世に知らされずにおわったかもしれないのである。

そうであるならば、同じく取るに足らない筆者の思い込みかもしれないが、インタビュー記録としてはまったく不可欠でない聴き手の「戸惑い」には、それが書かれることで、業界の常識にじゃまされることなくありのままの語りを引用することができる、魔除けのようなはたらきがあるのかもしれない。それにしても、貴重な語りの紹介を阻害する業界の常識とは、なんと愚かしいものか。

## 5. 自死遺族の「わかちあいの会」にかんするインタビューから

これまでさほど拘らずに「問う」と言ってきたが、筆者のばあい、語り手にむけて発する「問い」には大別、ふたつの性格を持たせており、それを話題の五つめとする。非または半構造化インタビューにおいては、質問は状況にそくして柔軟に発せられ、回答のしかたにたいする制約も少ない。私もそれに学んで、語り手の応えを準拠点としながら質問を重ねるように心がけている。自死遺族へのインタビューは、かれらの「わかちあいの会」での経験を理解しようとするものだが、初発の問いは参加した経緯、おおよその感想などを訊く。そうして言われた理由や心もちを探究の手がかりとして、それらについてさらに訊きすすめる。ごく単純化してみるならば、まずは何を訊くべきかを聴き（「折り合いをつけるために参加した」「居場所を見つけた」）、語り手がそう表するにいたった仔細にむかう問い（折り合いとは、居場所とは）を模索するのである。

Kさんのばあい（時岡 2011）

=== 以下引用 ===

右の理解がひどく誤っているとは考えにくい。けれど筆者には、いくつもの不足があると感じられた。Kさんは経験や心情を「相対化」して「心のざわつき」と折り合いをつけたいと言う。それはたとえば「仕方なかった」などと思えばいいことであろうか。否、Kさんのもとめはまったく対照的である。かれは「どうやったら救えたんだろう」と果てなく問い続けている。ざわつきは抑えられるはずもない。Kさん自身が強調するとおり、結局かれはふたりを喪っている。わかちあいの場の運営に努めたとして、それで自分を「なんとか保つ」ことができるのか。いったい、Kさんは何をもとめているのか。

重ねて訊く筆者「折り合いというんだから、何かと何か折り合うわけですよ。それは何と何ですか」。質問の途中、Kさんは筆者をさえぎるように声を出した。

Kさん いま言われて〔思ったのだけれど〕、ある種の罪悪感がずっとあって、それをなんとか静めようとする、っていうか。罪悪感で自分がざわつく。「あの時、こう言っとけばなあ」とか「どうしても取り返しがつかんなあ」とかね、思うんですよ。そのざわつきから逃げるんじゃなくて、向き合って、その作業そのものがある種の罪悪感と、こう、折り合いをつける作業、みたいに〔なる〕。という意味の「折り合い」なのかな。

かれの言う「罪悪感」は、妻と息子の苦悶に何かしらかかわって、できれば自死を止められていたらと悔やむ情念そのものである。筆者は、それがなぜ、遺族どうしのわかちあいで解消されるのかと問いを立てた。しかし、かれは罪悪感を解消したいなどと思ってもない。たほうKさんは、かれ自身の後悔や罪悪感とはちがう回路からも遺族のわかちあいの意義をつよく感じていた。けれど両者をしかるべく切り分けて考えるにまでは至っていない。こうして筆者とKさん、ふたりの問答は、しばらくちぐはぐに続いた。

地元で「わかちあいの会」を運営することが何かしら罪悪感との折り合いに通じるのかと、筆者は重ねて訊いた。Kさんは自嘲気味に、俗っぽく言えば罪滅ぼしの側面もあると苦笑した。

筆者 でも、そんなこと〔会の運営〕をしても、罪は滅びないのでは？

Kさん や、罪悪感を、軽減するっちゃうのは、あるんだよ、やっぱり。だけど、そのこと〔語りあうこと〕を、あるいは社会的な改革にちょっと繋げたいっていう、思惑みたいなものはあるんですよ。〔中略〕だから、一面なんですよ、罪滅ぼしという部分は。でもその一面はいつもあるよ、っていう……。行ったり来たりするんですよ。一方では社会的に発信して、行動を起こして。でも一方では、お前、そんなにえらそうなこと言える立場か？ 実際には、嫁さん死んで、子どもまで結局は殺してるじゃないか。そんなお前が何やるんだ？ っていう……。

ここでKさんは筆者に、ひとりの自死遺族としての心情と、会の運営をおおきく担う務めからの解説を、さほど弁別せずに話している。Kさんのなかでは、ほかの遺族とのかかわりの全体がかれの「罪滅ぼし」、あるいは「折り合い」に通じている。たほう、自死遺族は社会的環境からさまざまな困難を強いられており、遺族の語りあいの場はそれらを改編するところみでもある。自死遺族のおかれた一般的環境が、Kさんについてはかれのもとめる折り合いの作業を阻害している。ゆえに、Kさんにとっては、ほかの遺族のための尽力とかれ自身の希求とがよりあわさってひとつになるのである。

=== 以上引用 ===

本稿（および本稿冒頭で紹介した「テーマセッション」）の趣旨に照らしてもっとも注目すべきは、筆者の質問をさいごまで聞かずにKさんが「いま言われて〔思ったのだけれど〕」と話しはじめた箇所である。私は、かれが質問の途中から応えはじめたさまを示し、その応えはさほど整序されず、思いついたまま口にされたものであることが読者に了解されるようにも努めた。読者のなかで誰より大切な一人は、私にとって、Kさんその人である。かれがこれを読んだとき、自分はたしかにこう話したと（それは記憶の有無ではない）言えないような記録を書いてはならない。

こう話した、の含意はいくつもある。それは発話の完全な再現ではない。細部をト書きでおぎなうこともある。話されたことがらの前後を入れ替える（くり返し話されたばあいに、大づかみな表現を先に、仔細な言葉を後にするなど）のも禁じていない。ただし、ながい問答をできるだけ略さず、とどのつまり〇〇だ、煎じ詰めれば〇〇である、といった記述にはしないように努めている。その〇〇とは、あくまで私と語り手がつむいだひとつの理解と表現なのであって、私の問いが少し違っていたら、Kさんが私に何かを言われて思いつかなければ、生じなかった認識だからである。一般に非構造的または半構造的なインタビューでは「この聞き手だからこそ引き出せる語り」が注目されるようだが、私の物する聴きとりの記録については、読み手に「自分ならここで違う質問をする、そうしたら語り手はこう応じるのではないか」などと思って眺めてもらいたい。段落の冒頭にもどれば私は、語り手が「自分は訊き手（時岡）にそう訊かれたから、こう応えたのだ」と言えるように努めて書いているのである。

筆者は、Kさんに、かれ自身の地元で「わかちあいの会」をつくり運営をはじめた理由などを訊いていた。その途中、ふたりの他界について「折り合いがついてない」との言葉を得て、折り合いとは何ですかとくり返したずねている。かれの「折り合い」は「わかちあいの会にもとめるもの」と同義である。私は「折り合い」に言寄せ、それを重ねて訊くことで、Kさんのなかに確かにある、けれど端的に言って表せない“もとめ”の析出に努めた。すると思いがけず、かれは「罪悪感」を挙げ、それと会の運営とのかかわりを問えば「罪滅ぼし」なのだと続けた。なぜ罪滅ぼしになるかと訊いたのは、私がほんとうに理

解できなかったからである。聴きとりはそうして、故人を語りあうことがKさんの「罪滅ぼし」になる回路の探究へと接続されていった。

美織さんのばあい（時岡 2013）

=== 以下引用 ===

（前略）これもまた遺族から同じ言葉をくりかえし聞く“自分だけじゃない”という安堵について、やはり筆者の理解はきわめて不十分である。美織さんは続けて「自分は生きていていいんだっていう、そんな感じかな。まあ、自分の居場所があるんだ、っていう…」．すぐさま問いを重ねる筆者、居場所というのは、何ですか。

美織さん「うーん、じゃあ〔あなたは〕居場所がないって感じたことってありますか？  
それを〔筆者に〕聞いてみたい。それを感じたことのある人って、どれくらいいるんだろう、って思う」．

筆者「あんまりいないと思います」．

美織さん「そうだよね。そうだよね。…、そうだね…。そう…。あんまりいないと思うんだよね。自分はひとりぼっちなんだとか、孤独なんだって感じたことのある人は…。〔中略〕その苦しみから、解放された、その瞬間。ひとりじゃなかったんだって…。そうねえ…。そっから抜け出せないでいる人には、ひとりじゃなくなっただっていう時の、そのよろこびは分からないかもしれないけど、『あ、光が差した』みたいな…。すごい暗闇だったけど、光が差した、みたいな(笑)、そんな、なんでそんな顔するの(笑)?」

末尾は、すでに話題が変わっている。筆者なりに真剣に聴きながら、美織さんがふきだしてしまうほど眉間のしわを深くしていたようである。けれど本当に分からないのだ。頭のなかにそれらしい絵はうかんでも、感受できたとはとても言えない。美織さん「そうかもね。孤独を味わったことのない人には分からないかもしれない」。このような断絶から筆者には、美織さんの辛い心もちの重層的であるさまがようやく理解された。兄の発症や自死に直接的に由来する苦しきのまわりを、彼女を「ひとりぼっち」にする状況的な苦しさがとりまいている。なかでも後者について、筆者の理解はきわめて乏しかった。

=== 以上引用 ===

ここで訊き手の私が追っていたのは、遺族が感じるという「“自分だけじゃない”という安堵」のありさまである。美織さんはそれを「自分の居場所がある」ような心もちだと言い、私は「居場所」とは何かと問うた。けれど美織さんはその問いかけに異和をおぼえ

たようで、むしろ「居場所がない」ような心もち、あるいは「ひとりぼっち」と感じることの苦しみをさきに了解するように訊き手をうながす。これを書いている現時点からおぎななって言うならば美織さんは、遺族の感じる安堵を、それがかれらをおとずれるまえにおかれた「ひとりぼっち」の反転として理解すべきだと教えたのである。

筆者は先のKさんに同じく、わかちあいの会、その場のありさまを考究の対象としている。ゆえに聴きとりはおおむねその場に照準しながら進行するが、さなか、語り手である美織さんはその場を理解するためには遺族のおかれたふだんの状況を把握、理解しなければならないのだと言って私を諭した。いったい訊き（聴き）手は何を問うべきか、私の語り手はしばしば、それらを教え示してくれる。

語り手が表した言葉をおもな手がかりとし、解釈という方法によってことがらを理解しようとするとき、与えられた／どこまでの言葉に照準すればよいかをあらかじめ決めることは難しい。筆者は、美織さんが「自分の居場所がある」と言ったところで話題を切り上げて“遺族は遺族会にかれらの居場所を見つけて安堵する”などと書いてまとめることができたかもしれない。しかし、じっさい私は「居場所」の語に込められた心もちが感得できなかったので美織さんに問い、それに応えるなかで彼女は、自死遺族の心的経験をめぐる筆者の認識の不足、遺族でない人びととのあいだの隔たりなどを話した。

やりとりの細部だけを見るならば、訊き手の問いと語り手の応えは整合していない。しかしその不整合は巧まずして、語り手じしんによる孤独の実相の表現（光が差した）を生んだ。私はこのようなとき、対話の過程すべてに価値があるとみて、紙幅のゆるすかぎりを採録する。

## 6. インタビューという方法の特質

本稿（および本稿冒頭で紹介した「テーマセッション」）の趣旨に即して、非構造的なインタビューにもとづく論考について、筆者が心がけて努める訊き手としての実践、および編集、記述の方途に照準して概括する。

筆者の訊き手としての問いは総じて、語り手に、経験をかれみずからふり返りそのありさまを教えてほしいと求めている。そこで訊き手にはむろんあらかじめ「知りたいことがら」はあるが、それを知るためにどのような情報を得るべきかのリストはごくわずかにとどまる。自死遺族が「わかちあいの会でどのような（心的）経験をしたか」を知りたいばあい、参加のきっかけや頻度などはたしかめるが、「じっさいに参加してみて、どうでしたか？」以外の質問は十全には計画できない。語り手がどのように感じたり、思ったり、考えたりするかが不可知だからではなく、語り手がそのうちどれを言うべきだと判ずるかをこそ知りたいからである。かれはじしんの心的経験をふり返り、言葉で表して訊き手に教える。すなわち、語り手はみずからの意に沿いながらさまざまに見て、かれの意にかなうやり方で訊き手にそれを伝える。

なかには、その場ではじめて生成されたかれの自己認識が、誰よりはじめて訊き手に語

られるばあいもある。訊き手は語り手の思考をうながし、語り手は未知のまなざしをみずからの経験たちにそそぐ（学会の部会報告でフロアから質問を受けたときのように）。

そのとき、語り手に選ばれた視座の妥当性に議論の余地はないが、訊き手としては、その同じ視座からもう少し微細にあるいは概括的に見てほしいと求めたり、その視座が採られたわけを探究しようとする。この問答は、語り手にとっての自明をいくらか改編することになるばあい（「あ、でも、怒りより悔しさの方が強いかな」）も、語り手にそれまでといくらか異なる自己像の描き方を試してもらうことになるばあい（「言われて〔思ったのだけれど〕、ある種の罪悪感がずっとあって、それを何とか静めようとする、っていうか」）もある。そこではいずれも訊き手が語り手の観察や表現にはたらきかけて、訊き手にとってより了解しやすい観察や表現を得られるようにしている、すなわち語り手の自己認識への介入である。介入はときに語り手に奇異に感じられるばあいもあり、訊き手にたいする否定的な声が発せられることもある（「え、だって、なんで分からないの？」）。筆者はそのような違和の声も、努めて論考に載録するようにしている。

語り手が訊き手の初発の問いにたいして何を選び、応ずるかはできるだけ語り手の意に沿うようにする。けれどひとたびそこで示されたことがらについては、それができるだけ訊き手の理解に資するものとなるように重ねて問うたり言い換えを申し入れたりする。おなじような工夫は、その後、語りの編集と記述においても継続される。

いま、聴き手である私の手もとに得られた情報、すなわち録音された音声といくらかの手控えは整理されず、文字どおり“まるごと、ありのまま”の状態である。私は次に、私じしんの意に沿ってそれらを整理し、論考を物すことに努める。

筆者が提出する論考は、語り手の言葉を私がどのように理解したかの記録である。聴きとりは時間とともに進められるが、得られた情報は全体として総合的に理解される。冒頭の話題がインタビューの全体を支えることもあるが、インタビューの終わり際になってようやく、冒頭で聞いた言葉の意味が了解されることもある。したがって語りを聴きとりの時間の流れに沿って忠実に抄録するのではなく、時間的には別個の、複数の箇所を結び合わせながら記述するやり方（編集）が適切である。

編集の必要は、まず、インタビュー当時の問いと応えが筆者の対象理解に併行していないことから生じる。調査票調査であれば一般に、導入的な質問からしだいに詳細な項目へ、回答者の答えやすさに配慮しながら構成される。それらにもとづく調査報告もおおむね設問の順に章立てされるだろう。調査票、報告書いずれの順も、調査対象を理解するという目的にかなっているからである。たいして筆者のインタビューは、はじめに語り手じしんにふり返りを促し、インタビューの目的に照らすならば何を見るべきかについての教えを乞う。わかちあいの会に参加してどうだったかと訊き、たとえば「そこでの出会いは、ほんと衝撃でね、私にとって」との応えを得れば、衝撃とは何か、なぜ衝撃だったのかを重ねて訊く。すると語り手の現在は故人の他界の場面にも、その後の暮らしの日日にも、また辛い思いをあげわった友人の結婚披露宴の席にも移される。インタビューの別の箇所で

それらが思い出されて教えられることもある。さなか、あらたなキィ・ワードが話され、先にそれについて質問を重ねなければならなくなる。こうして、語り手を理解するための情報はインタビューの時間軸上に散在する。あるいは筆者のばあい、ただ一度かぎりの聴きとりは（共同研究等の制約があるものを除けば）行わない。ここでは「次回までに思い返して／考えておいてください」など語り手に時間をかけた応えを求めるのが常である。そうしたあらためてのふり返りを重ね合わせたりつなぎ合わせたりする編集も不可欠となる。

具体的な情報（語り）を話題ごとに集めるという前段の事情のほか、それらの話題を順序立てて記述するという目標からも編集の必要を言うことができる。順序とは、聴きとりをおえた時点で私がたっした対象理解を、私の意に沿って表するさいの構成である。私の理解は、なによりまず語り手の教えた自己観察の情報にもとづく。しかしそれらを足し合わせても不十分と判ずるばあい、私の解釈によって話題と話題を架橋したり、できごとの想像復元をこころみる。そのさい、インタビューの時間軸、あるいは語り手の経験の時間軸とはちがう順序、すなわち私の意に沿う順序で語りを用いることになる。

編集と記述にさいしては、また、問いと応えがあらかじめ設定できないことに由来した必要もある。インタビューのさなか、その場で生成された問いと応えを用いて記述するさいには、それらの生成過程をも明示しなければならない。ときには（狭義の）問いと（狭義の）応えとが整合しないばあいもある。けれど不整合こそがそのさきの語り手の認識や言葉を生成したのならば、すべての問いと応えを採録するのが当然である。

抽象のていどを高め、全体を綜じて述べる。訊き手がうながし、語り手の意に沿って言葉が発せられるインタビューは、語り手の自己認識の生成と表明の過程である。そこで得られた情報は訊き（聴き）手の意に沿って編集、記述されるが、それらは訊き手、すなわち書き手の認識の創出過程である。またこのとき「認識」とはさまざまな「解釈」とおおよそ同義であるから、インタビューとはたがいに訊き、話しながらそれぞれの解釈を表す作業であり、論考はそれらにさらに解釈をくわえて編集した一覧である。

#### [文献]

- Holstein, James A. and Jaber F Gubrium, 1995, *The active interview*, Sage Publications. (= 2004, 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティヴ・インタビュー』せりか書房.)
- 池田光穂, 2019, 「書評 池田佳南枝著『記憶と感情のエスノグラフィー—認知症とコルサコフ症候群のフィールドワークから—』」『保健医療社会学論集』29(2): 85-6.
- 伊藤智樹, 2018, 「書評：時岡新『＜不自由な自由＞を暮らす』（東京大学出版会, 2017年）」『社会学評論』69(3): 424-5.
- 木村俊介, 2017, 『インタビュー』ミシマ社.
- 能智正博, 2011, 『臨床心理学を学ぶ6 質的研究法』東京大学出版会.

- 大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋・永野武編，1999，『社会調査へのアプローチ—論理と方法—』ミネルヴァ書房。
- 大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋・永野武編，2005，『社会調査へのアプローチ 第2版—論理と方法—』ミネルヴァ書房。
- 佐川佳南枝，2017，『記憶と感情のエスノグラフィー—認知症とコルサコフ症候群のフィールドワークから—』ハーベスト社。
- 総務省，2018，「外交に関する世論調査」，内閣府世論調査ウェブサイト，（2019年10月12日取得，<https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-gaiko/index.html>）。
- 庄司俊之，2018，「〈書評〉障害当事者の存在と自由：時岡新著『〈不自由な自由〉を暮らす』を読む」『専修人間科学論集』8(2): 141-7.
- 時岡新，2011，「つかない折り合いをつける」『参加と批評』5: 199-240.
- 時岡新，2013，「生きた意味を残したい」『参加と批評』7: 131-68.
- 時岡新，2016，「再生——ある自死遺族と遺族会の十年」『参加と批評』10: 31-97.
- 時岡新，2019，「アクティヴ・インタビューと語りの生成」『福祉社会学会 第17回大会 報告予稿集』: 77-8.

#### 書評・その1（伊藤 2018）

（前略）特徴的なのは、香取さんの言うことをなかなか理解できない著者がしつこく質問して、香取さんがそれに答えていく文体が一貫している点だ。2人の会話は時に要領を得ず、各章末に考察やまとめがあるわけでもない。臨場感がある反面、特に各章の前半は苛立ってしまう。（後略）

#### 書評・その2（庄司 2018）

（前略）旧来のインタビュー調査ではインタビューアの痕跡は消されなければならなかった。それが客観性を擬制する手続きだったわけだ。それに対し、新しいライフヒストリー研究では聞き手自身をも書き込み、「この聞き手だからこそ引き出せる語り」に注目したりする。本書でも、聞き手が何を聞いたか、どこに疑問を感じ、重ねて何を聞いたか、そのプロセスが詳細に描き出されている。それが嵩じていくと、やがて語り手の語りを再構成するタイプのライフヒストリーには留まらず、やがて対話の記録に近づいていく。（中略）執拗に問いを重ねるのは研究の必要だけでなく聞き手の個性に属するところも大きいだろうが、それを受け、執拗に言語化しようと努力する姿は間違いなく語り手の個性だろう。本書で描かれるのは香取さんだけではない。聞き手・語り手双方の存在が明示され、そのふたつがぶつかる瞬間が描き出されている。（後略）



\*\*\*\*\*

【編集後記】 『現象と秩序』第 11 号をお届けします。今号より編集長が交代しました。とはいえ、編集作業については右も左もわからない状況であるため、編集作業自体は前編集長の主導下でおこないました。前編集長および編集委員、編集幹事、編集・印刷協力をいただきました皆様の多大なるお力添えに、ここに感謝の意を表したいと思います。

さて、今回は、2つの特集（各2本）と2本、合わせて6本の論考が収録されています。

第1特集「学問の不可視の前提を外して研究しよう」では、第17回福祉社会学会における同テーマの報告を、論考の形にさせていただきました。「普段気づかれないこと」、とりわけ「業界の常識」といった「不可視の前提」に縛られていて気づかれないこと、あるいは気づかないようにしていたことを明るみにしていくことは、生活者のリアリティに沿った学問の確立にとって重要な作業だと思われま

す。第2特集「音楽療法のエスノメソドロジー」では、両論考とも音楽療法場面を撮影したビデオデータを扱っています。拙稿の話で恐縮ですが、データを見ているうちに次々と新たな気づきが生まれ、当初書こうと思っていた内容とは全く異なるものになってしまいました。しかし、これこそが、データから理論をつくり上げる過程なのだろうと感じています。

昨今、量的データには表れえない、質的データへの関心が高まりつつあります。第2特集の前書きにも記しました私生活データへの関心は、「気づかれていないこと」あるいは「気づかなくてもいいと思われていたこと」への関心です。こうした生活環境データは、身体化されているがゆえに、当事者にとって言語化しづらいデータでもあります。それを記述していくスキルは、社会調査教育において今後より重視されるべきではないでしょうか。

ご意見やご要望、また、今後の特集に関するご提案等ございましたら、下記の編集室までお知らせくださいますと幸いです。今後とも『現象と秩序』をよろしく願います。

(Y.H.)

\*\*\*\*\*

『現象と秩序』編集委員会（2019年度）

編集委員会委員長：堀田裕子（愛知学泉大学）

編集委員：檜田美雄（神戸市看護大学）、中塚朋子（就実大学）

編集幹事：尾崎友祐（神戸市外国語大学）

編集協力・印刷協力：村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第 11 号 2019年 10月 31日発行

発行所 〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 檜田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074（檜田研）， e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>